

The performance of Takemoto Harimanosyojyo

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-09-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東, 晴美 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1995

竹本播磨少椽の義太夫節

―「増補用明天王」と最古の稽古本「菅丞相冥加の松梅」

東 晴美

本稿では、竹本播磨少椽の義太夫節を知ることのできる資料2点を紹介する。本稿で扱う資料は、『義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集成』72巻（以下 未翻刻作品集成と略称¹⁾）に翻刻紹介したものを補足するものである。

「増補用明天王」は、「用明天王職人鑑」の三段目まではそのままだに、四段目を増補改訂して上演した。未翻刻作品集成での解題では、増補された四段目以降の諸本の異同等について解説をしたが、三段目までについては、実質的には「用明天王職人鑑」の異同となるので触れなかった。従って、本稿では、三段目までについての異同を紹介する。

「菅丞相冥加の松梅」は、最古の稽古本とされる写本と、明和三年二代目竹本政大夫一周忌追善興行時の七行の正本がある。前者については、木谷蓬吟『浄瑠璃研究書』（昭和一六年、第一書房）にて紹介されているため、未翻刻作品集成では、後者の方を翻刻した。しかし、木谷氏の翻刻には文字譜が施されておらず、また、最古の稽古本という資料的価値を鑑み、本稿にて改めて文字譜を付して翻刻を行った。

一 増補用明天王

(一)「増補用明天王」七行本三段目までの資料的価値

浄瑠璃の作品の全てをおさめた通し本（丸本）は、近松門左衛門の活動時期の途中から、八行本から七行本に切り替わり、以後、七行本が定型となる。浄瑠璃本を研究する神津武男氏によれば、切り替えた時期と板元は、竹本座については、正徳一、三年頃、山本九兵衛によるとする²⁾。なお、近松の浄瑠璃本に關しては、『外題年鑑』では、宝永七年（一七一〇）『吉野都女楠』から七行本となり、それ以前の当たり浄瑠璃も七行に改板したと記されている。

「用明天王職人鑑」ならば、まず、八行本が刊行され、その後七行本に切り替わった可能性が考えられるが、七行本の所在は確認されていない。

「用明天王職人鑑」諸本については、山根為推氏の詳細な研究がある³⁾。しかし、「増補用明天王」は、近松没後に改訂されたもので、近松の正本研究の対象外として山根氏は言及されて

いない。本文の大幅な改訂のない七行本「増補用明天王」の三段目までは、所在が確認されていない「用明天王職人鑑」の七行本の手がかりとなりうるものである。

検討の前提として「用明天王職人鑑」から「増補用明天王」までの流れと竹本播磨少掾の動向は次のようになる。

「用明天王職人鑑」は、宝永二年（一七〇五）十一月、大坂竹本座にて初演。竹本筑後掾（太夫）、近松門左衛門（作者）、竹田出雲（座本）の体制での最初の作品である。その後正徳二年（一七一）三月大阪竹本座、同年名古屋で再演の記録がある。正徳四年に竹本筑後掾が没し、門弟の竹本政太夫が竹本座を牽引し「国性爺合戦」の大きたりで竹本座を立て直した。その後、享保九年に近松門左衛門が没する。

「増補用明天王」は、享保十七年（一七三二）四月、大阪竹本座にて上演。竹本政太夫が、大序、二段、三段目を語る。竹本政太夫は、享保二十年上総少掾受領、元文二年（一七三七）に再受領して竹本播磨少掾藤原喜教と号す。

「用明天王職人鑑」八行本と「増補用明天王」七行本の異同がどの段階で生じたかを検討する前提として、浄瑠璃本の刊行までの流れは、次のように考えられている。

作者の原稿が成ると、座本を通して奉行所へ提出され、その裁可を待つ間に節付けを含めた上演準備がすすめられ、上演許可が出たところで、公演の初日を迎え、出版に関しては審査は省略されて板元より浄瑠璃本が刊行される。文字譜に関しては、作者の原稿が審査中に太夫によって付されたと考えられる。ま

た、山根為雄氏によれば、本文の読みに関しては、作者の手離れた所で読みが決められている場合のあることを想定している³⁾。

「増補用明天王」の三段目までの七行本と「用明天王職人鑑」の八行本との異同箇所は、「増補用明天王」以前に「用明天王職人鑑」の七行本が刊されて、その板木を流用したのか、「増補用明天王」を語った竹本政太夫こと竹本播磨少掾の意向を反映させたのか、の解明につながる。

山根為雄氏は、「用明天王職人鑑」は、八行本でありながら、奥付に七行の正本とうたっており、正徳二年の再演の頃に八行本の板木を用いて印刷し、七行の正本とする奥付を誤って付した可能性が高いとし、また、正徳二年三月の再演以前に七行本が存在していた可能性を示唆する³⁾。

しかし、(三)で述べるように、「増補用明天王」七行本の三段目までは、捨て仮名や文字譜の傾向から、竹本筑後掾没後の、竹本播磨少掾の浄瑠璃正本の特色が見受けられる。ただし、これを決定づけるには、より多くの同じ近松作品の八行本と七行本の比較を経て検証すべきものである。本稿では、一つの可能性として、「増補用明天王」以前には、七行本は存在せず、増補上演時に新たに七行本が開板されたか、とするに留める。

(二) 近松全集と未翻刻作品集

近松全集と、未翻刻作品集の翻刻方針が異なるため、翻刻の表記が異なるが、原本の表記は八行本と七行本で同じ場合がある。

たとえば、本文の表記で、捨て仮名に関しては、数詞の「ツ」は、捨て仮名の「ツ」と区別するために、未翻刻作品集成では「つ」と翻刻している。近松全集では「ツ」である。また、漢字の表記は、未翻刻作品集成では正字体を優先するため、原本が「弥」であつても未翻刻作品集成では正字の「彌」で、近松全集は「弥」となっている。これらは原本の表記が同じなので、本稿では表記の異同としては採用していない。

異同の採用基準は、山根為推氏の近松の諸作品の調査に準じ、漢字と仮名、ルビや濁点、句点、文字譜に関して行つた。八行本と七行本の異同は、約二五〇〇箇所⁽⁶⁾に及ぶ。(なお、数え間違いなどもあるので、以下の数値は、おおよその占める割合で示した。)異同箇所を全て示すことができないが、全体的な傾向として次のことが指摘できる。

(三) 本文の異同

・漢字化

異同の全体のうち、約30%近くが、八行本での仮名表記が、七行本で漢字へと改められた事例である。さらに、漢字化されたもののうち、60%近くにルビが付き、10%ほどに捨て仮名が付いている。

逆に、八行本の漢字表記が、仮名へと改められたものは、15%である。

・ルビの追加

異同のうち、約25%近くが、八行本で漢字表記のものに、ルビを付している。逆に、八行本のルビ付き漢字からルビを外し

たものは0.4%である。たとえば、「恐悦」の悦、「にる枕」(新枕)など、別のよみの可能性が低いものや、「受領」などその前にルビ付きで頻出して省略したものなどがある。

仮名からルビ付きの漢字にした例、漢字にルビを追加した例をあわせると、異同の全体の41%を占める。七行本化の傾向として、ルビ付きの漢字化が顕著だといえる。このことは、山根為雄氏が『けいせい反魂香』で行つた諸本調査の結果で「七行本は漢字又は振仮名つきの漢字を多く用いる」という指摘と一致する。⁽⁷⁾

・捨て仮名の追加

捨て仮名に関して、神津武男氏は、竹本播磨少掾以前や同時代の豊竹座の初板の浄瑠璃本は、「捨て仮名に頼らず、基本的には本文行に送り仮名として記載した」とし、竹本播磨少掾の新工夫として「捨て仮名の多用」を指摘する。今回の異同調査で、それが数的に証明されたと言えよう。⁽⁸⁾

「増補用明天王」の七行本では、異同のうち、20%で、捨て仮名が追加された事例がみられる。このうちわけは、漢字に捨て仮名が追加された例が85%、かなを漢字化して捨て仮名を付したのが15%である。

八行本には、数詞以外の捨て仮名が十例ほどであるのに対して、七行本では捨て仮名が圧倒的に増えていることがわかる。

以上の事から、八行本からの漢字化、漢字へのルビと捨て仮名の追加で、おおむね異同の全体の70%を占める。

・その他(⑧は八行本、⑦は七行本 以下同じ)

送り仮名の変化(⑧覚えず↓⑦覚え、⑧尋↓⑦尋ね、など)、
仮名遣いの異同(⑧うへて↓⑦うゑて、⑧をと↓⑦おと、など)、
他に清濁の異同などがある。山根氏の諸本調査によると、山
板の十四・十五行絵入本は、文字譜に関しては杜撰ではあるが、
十四・十五行絵入本のみが正しい事例もあるとの指摘がある。^⑤
表記に関しては、基本的には八行本を参照している。例えば表
No.34は、十四・十五行絵入本が「仁心」とするが、八行本に従っ
ている。八行本が誤った表記をしている事例で、十四・十五行
絵入本と表記が一致したものは二例であった。

これらの変化は、先ほどの刊行までの流れと、近松没後であ
ることから、太夫か板元の意向と思われる。

(四) 句点(区切り点)

山根氏の諸本調査では、区切りの異同に関しては、諸本の異
同の正誤を判定することは難しいとしている。今回の調査では、
七行本に追加された事例が、17例、削除(あるいは脱落)した
事例が11例ある。特に顕著な傾向を指摘することは難しい。ま
た、句点の位置の変化については、前後の文章もあわせて検討
する必要があり、今回の調査では、表での掲載は異同箇所の指
摘に留めた。

(五) 文字譜

未翻刻作品集の文字譜の翻刻にあたっては、坂本清恵氏が、
近松正本の文字譜の例と、享保以降の正本の文字譜の例を比較
して方針を決められた。「ウ」「ハル」「中」に関して比較の結

果、近松正本は、アクセントを反映して付されており、漢字の
場合でも二音節の後半にアクセントがある場合は、文字譜も下
につく事例などを紹介された。一方、享保以降は、語頭の「ウ」
「ハル」はアクセントを厳密に示すという意識が認められない
とする。また、「中」は低いアクセントに付されるというよりは、
低い曲調で始まる箇所が付される傾向があると指摘する。その
ため、翻刻にあたっては、「ウ」「ハル」は、原則的に語頭に翻
刻する。明らかに語頭でない位置の場合は、その文字の直前に
翻刻する。「中」に関しては、語頭に統一することなく、その
ままの位置に翻刻する方針を示された。^⑥

未翻刻作品集72の『増補用明天王』の翻刻は、八行本の文
字譜とゴマ譜の位置も含めて検討し、八行本と同じ位置の場合
は、近松全集と同じ位置に翻刻を行った。この点で、従来の未
翻刻作品集の凡例通りではない。その上で、八行本と七行本
の文字譜の異なるものを表で示した。その結果、坂本氏が指摘
されるように、語頭に「ウ」がつく事例が多くみられる。表の
記号の*は、七行本のみにある文字譜表記だが、句頭に「ウ」「ハ
ル」がみうけられ、享保以降の傾向を示していると思われる。

もう一つの特徴は、必ずしも八行本と同じでない事例である。
八行本と文字譜が異なるもので、十四・十五行絵入本と同じ事
例には、記号に*を付した。七行本を製作するにあたり、新
たに文字譜をつけたのか、諸本を検討したのかは、他の作品も
含めてより詳細な検討が必要になる。

表 記号の*は七行本のみ、文字譜表記 *は十四・十五行絵
 入本と同じ文字譜表記

20		にげ出るを。[17ウ]	にげ出るを [14ウ]
19		手をかけばこそ [15ウ]	手をもかけばこそ [13ウ]
18		ねつたうのごとくにて。 [15オ]	ねつたうのごとくなれ共。 [12ウ]
17	*	《中ウ》酒(しゆ)ゑん [14ウ]	《ウ》酒ゑん [12オ]
16		給ふ《トルハル》ゑにし [14オ]	給《ハル》ふゑにし [11ウ]
15		うは《ハル》ゑや [13ウ]	うはゑ《ハル》や [11ウ]
14		《ハルフシ》ひくや [13オ]	ひくや [11オ]
13		色《中》に。花ぬりの [13オ]	色に。《中》花ぬりの [11オ]
12		かもじ《地ウ》とき [11ウ]	かもじ《地》と《ウ》き [9ウ]
11		吹目(すいもく) [9ウ]	吹目(すいも) [8オ]
10	**	《詞》エ、無念(むねん) [8ウ]	エ、むねんしこく [7オ]
9		声を上《ケ》。 [8ウ]	こゑをあげ [7オ]
8	*	《ハル》ゑいらん [6ウ]	《ハルウ》ゑいらん [5オ]
7		《地ハル》外道(げだう)の [6ウ]	《地色ハル》外道の [5オ]
6	*	《中ウ》とのもづかさ [6オ]	《ウ》とのもづかさ [4ウ]
5		立《ツ》たりけり。 [6オ]	立たりけり [4ウ]
4		よしそれはさも候へ。 [4オ]	よしそれもさも候へ。 [3ウ]
3		道とや申《ス》 [4オ]	道とやは申 [3オ]
2		天子(てんし) めぐみ [1オ]	天子。 めぐみ [1オ]
1	*	《序詞》宋(そう)の [1オ]	《序》宋(そう)の [1オ]
		七行本	八行本

44		《ウ》文誠(まこと)しやか [28オ]	文《ウ》誠しやか [24オ]
43		世を見限(かぎ)り。 [28オ]	世を見かぎり [24オ]
42	*	故なく《ウ》りべつと [28オ]	故なくりべつと [24オ]
41		《地色ウ》人にすぐれし [27オ]	《地色》人にすぐれし [23オ]
40	*	《詞》五の介承り [25ウ]	五の介承り [21ウ]
39	*	《地ハル》申《シ》もあへぬに [25オ]	《地》申もあへぬに [21オ]
38	*	《フシ》御なつかしや [24ウ]	《中フシ》御なつかしや [21オ]
37	**	《地色中》いかさま是は [23ウ]	《地色》いかさま是は [20オ]
36	*	《ウ》いづくより共 [23ウ]	い《ウ》づくより共 [20オ]
35		榮(さか)ふる。御代こそ [22オ]	さかふる。代こそ [18ウ]
34		しんた。 [22オ]	信心。 [18ウ]
33	*	珍重(ちんぢやう)《色》去(さ)り [21ウ]	珍重《色》去(さり) [18ウ]
32		組(くみ)《ハル》合《イ》 [21オ]	く《ハル》みあひ [17ウ]
31	*	《地ハル》くはつと見ひらき [20オ]	《地》くはつと見ひらき [17オ]
30		はつたとにらめば。 [20オ]	はつたとにらめば [17オ]
29		じり、く [19オ]	じり、くと [16オ]
28	*	《ウ》さんづのふすま [19オ]	三《ウ》づのふすま [16オ]
27	*	《ウ》さ程ねること [19オ]	さ《ウ》程ねること [16オ]
26		《中》どつこい《ウ》くうこいで [19オ]	どつこい《ウ》くうこいで [16オ]
25		《ハル》ねて見せよと。 [19オ]	ねて見せよと [15ウ]
24	**	《ウ》一度しつほりと [19オ]	一度しつほりと [15ウ]
23		床(とこ)に入《ル》べきに。 [18ウ]	床に入べきに [15ウ]
22	*	《地ハル》おめく声。 [18オ]	《地》おめくこゑ。 [15オ]
21		あふと聞し故 [18オ]	あふと聞し故。 [15オ]

68	*	《ウ》やたけ心の [38オ]	やた《ウ》け心の [32ウ]
67		ふうふの印《シ》を見せ給へ。 [37ウ]	ふうふのしるしを見せ給へ [32オ]
66	**	《ハル》尼公《にこう》は [37オ]	《ハル》尼公は [31ウ]
65		《地ハル》おりあへやつと [36ウ]	おりあへやつと [31ウ]
64		時に一《ト》間の内より [36ウ]	《地》時に一間の内より [31オ]
63	*	《ウ》なむ三宝 [35ウ]	な《ウ》む三ぼう [30ウ]
62		ヲ、かはいや [34ウ]	ヲ、かはいやな [29ウ]
61		《ウ》うたでは [34オ]	《ウ》討では [29オ]
60	*	《ウ》声をかけ [33ウ]	こ《ウ》ゑをかけ [29オ]
59	*	つ、み《フシ中》なまわりなく。 [33オ]	つ、みなき《フシ中》わりなく。 [28ウ]
58		いふてもかへらぬ [33オ]	いふてかへらぬ [28オ]
57		《地》たがひに《ウ》なごりは [32ウ]	互に《ウ》なごりは [28オ]
56		《ウ》にはかに秋風 [32ウ]	に《ウ》はかに秋風 [27ウ]
55		ゆ《ウ》ふべにも [32ウ]	ゆふ《ウ》へにも [27ウ]
54		すが《中》り付《キ》。 [32オ]	すがり付。 [27ウ]
53		《ウ》一《ト》先《ウ》君を [32オ]	一《ウ》先《ウ》君を [27ウ]
52		もしし《ソ》んじてはあしかりなん [32オ]	もしし《ソ》んじてあしかりなん [27ウ]
51	*	こんじやう《中》かな。 [31オ]	こんじや《中》うかな。 [26ウ]
50		首きつて [31オ]	首きつてきて [26ウ]
49		上座のしよくに [29オ]	上座の床のしよくに [24ウ]
48	*	頼ふだ人の《ハル》御帰り。 [28ウ]	頼ふだ人の御《ハル》帰り。 [24ウ]
47		我住《すむ》。里《さと》 [28ウ]	我住さと [24ウ]
46		《ウ》落よかし [28ウ]	おち《ウ》よかし [24オ]
45		生《いき》ふが [28オ]	いきやふが [24オ]

92	**	《ウ》承つて荷物《に》もつより。 [44オ]	承て荷物より。 [37ウ]
91	**	《地ハル》くやうの導師《だうし》に [44オ]	《地》くやうの導師《だうし》に [37ウ]
90		《ウ》一紙《し》 [43ウ]	一《ウ》紙《し》 [37ウ]
89		宝鯨《ほうげい》にして [43ウ]	ほうげいにして [37オ]
88	*	果《はた》して [43ウ]	《中》はたして [37オ]
87		四句の文《もん》 [43ウ]	四句の文。 [37オ]
86	*	道心成《ル》が。《地中》ある夜 [43オ]	道心《中》成が。《中》ある夜 [37オ]
85	**	《地ハル》語るまに [43オ]	《地》かたるまに [37オ]
84		《ハル》めいを御らんじ。 [42ウ]	めいを御らんじ。 [36オ]
83	**	思ひ出すう《ウ》き涙 [42ウ]	思ひ出すうき涙 [36オ]
82	*	《地色中》世に《ウ》ほだされぬ [41オ]	《地色》世に《ウ》ほだされぬ [35オ]
81	**	《フシ》ほつき心《し》こそ [41オ]	発起《ほつき》心こそ [35オ]
80		仏《ヶ》のゑんの [41オ]	仏のゑんや [35オ]
79	**	《地ハル》三《ん》因《あん》仏性《ぶつしやう》の [41オ]	《地》三《ん》因《あん》仏性《ぶつしやう》の [35オ]
78	**	《キン》名をうの花に [40ウ]	名をうの花に [34ウ]
77	*	《中フシ》よろひの袖 [40オ]	《フシ》鎧の袖 [34オ]
76		母上の。御《ウ》悦びを [39オ]	母上の御《ウ》悦びを [33ウ]
75		とちた《上》るまなこにも。 [39オ]	とちたるまなこにも。 [33ウ]
74	*	《ウ》今よりは [38ウ]	今《ウ》よりは [33オ]
73	*	《ウ》もろくくだくる [38ウ]	も《ウ》ろくくだくる [33オ]
72		すこし心も [38ウ]	すこしは心も [33オ]
71		涙の《フシ》玉のおも。 [38ウ]	なみだの玉のおも。 [33オ]
70		御心《上》と [38オ]	御心と [32ウ]
69		姫は《ハル》わかちも [38オ]	姫は《ハル》わかちも [32ウ]

114	*	《ハル》しんぼうは。〔52ウ〕	し《ハル》んぼうは。〔44オ〕
113	**	《地ウ》室君《むろぎみ》と〔52オ〕	《ウ》室君と〔44オ〕
112	*	《色》是狂人《きやうじん》め。〔51ウ〕	是《色》狂人め。〔43ウ〕
111	*	《色》是狂人《きやうじん》めもあて。〔51ウ〕	《色》是狂人《きやうじん》めもあて。〔43ウ〕
110		すそをしつかと取《ル》。逃《にげ》んと〔51ウ〕	すそをしつかと取《リ》。逃んと〔43ウ〕
109		いたはしければ〔51オ〕	いたはしければ。〔43オ〕
108	*	《地》我《し》はかしらもそりはし〔51オ〕	我はかしらもそりはし〔43オ〕
107		しかけられ《色》まぢや、〔50ウ〕	しかけられ《色》まぢや。〔43ウ〕
106	**	《地》扱はほうはい様の〔50オ〕	扱はほうはい様の〔42ウ〕
105		《詞》是申《し》ほうしさま。〔50オ〕	《詞》是申ほうし様。〔42ウ〕
104	**	《フキ地ハル》藤太入道走り出。〔50オ〕	《地ハル》藤太入道走り出。〔42ウ〕
103	**	《地ハル》くやうのには〔49オ〕	《ハル》くやうのには〔42オ〕
102		《謡詞》もろこしの〔49オ〕	《謡詞》もろこしの〔41ウ〕
101		つき鐘《色》あはれ。〔49オ〕	つきがね《色》あはれ。〔41ウ〕
100		鐘をうとみし其罪《つみ》は〔48ウ〕	《ウ》鐘をうとみし其つみは〔41ウ〕
99	*	《フシ中》今か。《ハル》いくかと〔47オ〕	《フシ》今か。《ハル》いらかと〔40ウ〕
98		しんたい心のま、と成《ル》〔46オ〕	しんたい心のま、成〔39オ〕
97		此かねをならして。〔45ウ〕	此かねをならして〔39オ〕
96	**	《地ハル》それ打ころせと〔45オ〕	《ハル》それ打ころせと〔38ウ〕
95	**	《詞》近比さし出がましう〔44ウ〕	近比さし出がましう〔38オ〕
94		下知《げぢ》してサア。〔44ウ〕	下知《げぢ》してサア〔38オ〕
93	**	《ウ》はまべにつめば。〔44オ〕	はまべにつめば。〔37ウ〕

136		《謡》山寺のや。〔58ウ〕	《ウタイ》山寺のや。〔49オ〕
135	*	我をのみ《ハル》追くるかと。〔58オ〕	我をの《ハル》み追くるかと。〔49オ〕
134		花ぶくろ《キン》日も〔58オ〕	花ぶく《キン》ろ日も〔48ウ〕
133	*	《フシウ》門に松立。〔57ウ〕	《フシ》門に《ウ》松立。〔48ウ〕
132	*	《ハル》是御ら《中》んぜよ。〔57ウ〕	是《ハル》御ら《中》んぜよ。〔48ウ〕
131		引とむ《引》る。〔57ウ〕	引とむ《引》る〔48ウ〕
130		露の《中フシ》おもたさよ。〔57ウ〕	露の《中シ》おもたさよ。〔48ウ〕
129		用明天王鐘入〔57オ〕	かね入の段〔48オ〕
128		あらはれた《引》り〔56ウ〕	顕はれた《引》り。〔47ウ〕
127	**	《同地》すはくうごくぞ〔56ウ〕	《同》すはくうごくぞ〔47ウ〕
126		声を《色》あげ。〔56オ〕	こゑを《色》あげ〔47オ〕
125	*	《地ハル》かたり給へば人々は。〔55ウ〕	《地》かたり給へば人々は。〔47オ〕
124		戌《いぬ》に七六五。〔55オ〕	戌に七六。五。〔46ウ〕
123		みんゑんは。そも雨土〔55オ〕	みんゑんはそも。あめつち〔46オ〕
122		鐘《かね》のくやうに。〔55オ〕	かねのくやうに〔46オ〕
121		道断《だうだん》〔54ウ〕	同断《どうだん》〔46オ〕
120		《ウ》何ことやらん〔54ウ〕	何ことやらん〔46オ〕
119	**	《大夫》ム、なんと〔54オ〕	ム、なんと〔45ウ〕
118	*	《詞》ひつきやう儻《おのれ》は〔54オ〕	ひつきやうをのれは〔45ウ〕
117	*	《地ハル》諸岩《もろいは》声を〔54オ〕	諸岩《こゑ》を〔45ウ〕
116		舌《した》ばやに〔53ウ〕	したばやに。〔45ウ〕
115	**	《地ハル》女房むつくと〔53ウ〕	《ハル》女房むつくと〔45オ〕

137		花やちるらん／＼花やちるらん 〔58ウ〕	花やちるらん花やちるらん〔49 オ〕
138	*	《フシハル》情の花や。ちりぬらん。 〔58ウ〕	《ウフシ》情の花や。ちりぬら ん。〔49オ〕
139		のぼらは〔59オ〕	のぼらば〔49ウ〕
140		つきまどはつて〔59オ〕	つきまどはつて〔49ウ〕
141		身はずみがまの〔59オ〕	身はずみがまと〔49ウ〕
142	*	共《キン》に〔59ウ〕	《キン》ともに〔49ウ〕
143	*	くるしと《下》嗔呼はる〔59ウ〕	くるし《下》となげきよばゝる 〔50オ〕
144	*	《地ハル》うろこをならし〔60オ〕	《上地ハル》うろこをならし 〔50ウ〕
145		太夫と〔60オ〕	大夫と〔50ウ〕

No.137の七行本の異同と、第四「さんろ玉世の姫道行」の異同は未翻刻作品集集成の解題にある。

二 「菅丞相冥加の松梅」

「菅丞相冥加の松梅」は、「天神記冥加の松」の解題である。「天神記冥加の松」は、享保二十年に上総少掾を受領した祝儀に、翌元文元年二月に大坂竹本座で出語りしたものである。「天神記冥加の松」の正本の伝存は不明である。元文二年に、播磨少掾を再受領した折に「菅丞相冥加の松梅」と改題して語る。このときの正本も伝存不明である。その後、明和三年二代目竹本政太夫一周忌追善興行時の七行の正本がある。この正本を、未翻刻作品集集成72に翻刻した。

これとは別に、東京大学駒場図書館所蔵の「菅丞相冥加松梅」とする写本がある。本書は、木谷蓬吟によって『浄瑠璃研究書』

で紹介された。七行本の正本は竹本染太夫と竹本綱太夫の掛け合いの指示があるが、本書にはそれが無い。本書は、箱の中に収められており、さらに、箱の中には中蓋があり、それぞれに識語がある。

木谷氏によれば、奥書（19ウ）の「文正」の下の印章は「竹本播磨少掾」と「藤原喜教」とあり、「清人沈草亭から贈来された記念のもの」と記す。さらに、寛延三年の寄主は二代目政太夫。文末（21ウ）の、文中の脇田氏は竹本喜太夫、文囀子は二世竹本政太夫とする。

中蓋の五代目竹本弥太夫による記載では、竹本播磨少掾こと初代竹本政太夫の正本を、息子の長右衛門を経て、二代目竹本政太夫へ贈られ、後に、通称河堀口（こぼれくち）三代目竹本長門太夫に贈られ、五代目竹本弥が太夫が所持するとある。

（箱の上書き）

竹本播磨少掾朱章本

菅丞相冥加松梅

元文二年一月勅許受領に際し上演

約二百年前、最古の床本

（中蓋）

菅丞相冥加松梅

竹本播磨少掾氏

受領之時語られし正本播磨嗣男長右衛門氏竹本政太夫氏へ贈

られ右方より河堀口竹本長門太夫師へ贈られ右方よりゆずり受
五代目竹本彌太夫所持

〔保護表紙〕「菅丞相冥加松梅」〔書題簽〕

〔表紙〕「菅丞相冥加松梅 竹本播磨少掾」

地中夫。芦原の中津国ウあれます神は多けれど。今度のウ諸願成
就も天満神の御利益益。ウ冥加にひらく花紅葉御ハルじあい(1オ)
有し其中むかし。ウつゝしみ申も下恐れながら。中もとより父
母なきふり人にて。スエテハルかんしやう公にやしなはれ。中ウく
はんがくのまどの雪ほたるの(1ウ)ひかりあきらかに。筆の
林もウ枝しげく。フシ詞のウハル泉中つきもせず。地ウしふにかん
のうまし〳〵てウ歌の道なをハルさかん也。ゑんぎていの御恵
(2オ)いウともかしこき勅により。ウ右大臣ににんぜられウ一
のかみに座し給ひ。スエテめでたきちうしん色なりしかど。詞ひ
だんのおとゝ藤原のしへい(2ウ)公のざんにより。地中をん
るのつみにうウきしづみ。ながれ行衛もウ白浪の。フシヲクリよせ
ては。かへり。ハルいとゞしく。中ウすぎウ行かたの恋しさも。
うれふる人の(3オ)ためとてはトルしはし。ハルとゞまる。こ
ともなく上都を出て。ウ末の中秋。心づくしのウ月のかげフシ今
宵は。げにもハル十三夜。地ウげつくはうはウ鏡ににたれ共(3ウ)
ハルつみをあかすことなく。ふうきはかたなのごとく中なれ共。
うれひをたゞす。平家ウみるにしたがひ。ハルきくに。したがつ

て。みなさんりつ。此秋ひとり(4オ)ウ我身のナラス秋と中なる。
フシハル思ひきや。キンあまのたくなはいキンさりせん下とは。フシ
とまやかた。中ひしき物には袖だにも。ぬれて其かひウあら磯
のヲクリみるめ(4ウ)を。かりのウ草枕。中跡なき夢とウ年も暮。
フシひとよをウ春ハルにあけそめて。フシウあらたまれ共。中我は
たゞ。物ハル鶯のふる巢よりウ涙のつらゝとけ(5オ)そ中めて。
軒端にきなく声にこそ。スエテいとゞ都は恋しけれ。中そなたの
空よと打ながめ。フシハルこちふかばノルにほひを。こせよ梅の
花。あるじなし(5ウ)とて。キン春なわすれ下そと。舞ゑいじ
ハル給へはふしぎやな。有つる梅はて中いしやうに。ハルこつぜ
んと中とび来る。梅はとび。ハツミ桜はかるゝ。ハルフシ世の中に。
中何とて(6オ)松はつれなかるらんと。すさみ給へばハル御
あとを。爰にしたひてウ老松も。末社といわひ申中也
ハツミかゝるきどくのあり。そ海。身のぬれ衣を(6ウ)ほさ
んとて。地ウ七日七夜ウいんししいをハルたちながら。天のさかて
をうつゝ、共ウわかでみはつる夢のよの。ウさせんのしもとウき
へ給ふフシはかなかりける(7オ)浮世かな。詞其頃ゑい山ゑ
んりややくじの座主。法性坊の僧正とてちとくけんひの大とく有。
地や、三ハルふくのなつの日も杉の嵐に秋(7ウ)を中つけ。ウ
九しきのまどのまへ十せうのハルゆかのほとりに。ゆがほつす
いのみみをた、へさんみつかぢの月影は。キンにうがかにうの
たな心。(8オ)ふさうしやりしてしん〳〵と月はさせ共しば
の戸を。たゝくべき人も色おほへぬに。詞いか成松の風やらん
あらはしたなの事やなど。(8ウ)地ハルとびらをひらきみ給へ

ばすぎにしきさらぎや後の五日に。世をはやうすと聞へし菅丞相にておわします。しやうじ入奉り(9才)しんやの御くはうりん何事にかはと色有しかば。ハルかんしやうこたへての中給はく。ウにこれる世に生れてウむしつのごんげんハルちからなし。さんしん(9ウ)のあたをほうぜんためいかづちとならん時。ぜんしん計こそいくはうめでたく中候へ。ウいか成勅使なりとてもウだいに参りハル給はずは。生ウタ(10才)世々にウ此中おんを。フシなどかはウほうハルぜざるべき。此御なげきは申ても色あまり有ルべし。詞たとへせんじの下るとも二度迄は参るまじ。ちよくし三度(10ウ)におよば、ふてんの下そつとのうち。王地にあらずといふ事なしさのみはいかゞとの給へは。ハル菅丞相の御色は殊外に替りつ。(11才)折節御まへにざくろををかれたりしを。おつとり口にふくんでばらぐとかみくだき。妻戸にくわつとはきかくる。あかきざくろはたち(11ウ)まちに。くはえんとなつてフシ三尺計もへあがる。

ウ僧正み給ひコハリしやすいのいんをむすんで。はんじのめうをとなへ給へばくはえんはきゆる煙の中に(12才)立かくれナラセうじやうはフシ行衛も。しれずとびさりて。ハルなをもしんいのほむらよりウなるいかづちと身をへんじ。さんしん時平を取ころし内裏(12ウ)にけさくをなして。我にうかりしうんかくをけころさんと立さわく。ウ雲のけしきもすさまじくフシ世の有様も常ならねば。ハルかち(13才)し給へと召によつて僧正はし、ん殿に座を色しめ。コハリ珠数さら／＼とをしもんで。ふもんぼんをウとなへければ。さしも闇の夜のこつく成(13ウ)

大内俄にはれてウめい／＼たり。されはこそウ何程の事の有べきそと。油断しける所にふしぎや御殿に色黒雲おほひ。稲妻四方(14才)にひらめきわたつて下山もくづれ内裏も空にさかのぼるかとしんどうひまなくナラス鳴神の。フシそれ／＼姿はあらわれたり。ハル僧正(14ウ)むかつて声をかけ。そつと四海のうちは皆王地にあらずと色いふ事なし。詞いわんやせうじやうきのふまではくんおんをかうふる。ない(15才)おんげちうの礼義みだん也。しづまり給へと有しかば。あら愚かや僧中正よ。ウ我をみはなし給ふうへは貴僧成共ハルおそるまじ。思ひ(15ウ)しらせん人々としてしよりうを引つれウひらめき渡り。フシ玉体あやうくみへ給へは。地ウふしぎや僧正のハルおはする所をいかづちおそれてな(16才)らざりける。し、んでんに僧正あれば。かうきでんにいかづちなる。ウかうき殿にうつり給へば。ウせいりやう殿にかみなりする。せいりやう殿にうつり(16ウ)給へば。なしつば梅壺ひるの御座。よんのおとゞを行ちがウひめぐりあひて我をとらじと。いのりは僧正。なるは雷もみあひ。／＼追かけ。／＼(17才)互のいきほひたとへんかたなくフシおそろしかりける有りさまかな。中千ウ手陀羅尼をハルみて給へばかんりの壺にもこらへずあら海の。しやうじ(17ウ)をへだて是迄なりや下コハリゆるし給へもんぼうひみつのほうみに預り。帝は天満自在天神とぞうぐはんを。菅丞相に下さるればウ忽(18才)いかりを色引かへて。ウ宝祚を守り奉らんと其報恩のナラス地一ち夜の印。ハル北野に千本の松がへやウ巢をくふ田鶴のよはひをは。君に(18ウ)さ、げて大国は亀の万劫ふるか

わの流れたへせぬ金銀珠玉御蔵の内へとう／＼と納る御代こそめでたけれ (19才)

文正 (印) (印) (19ウ)

此曲帖は先考受領頂戴の時 勅許の有難に感し旧号を變して冥加の松梅と題して出語りせられし正本なり其頃余に示し申されしは門人多き中にも (20才) 吾が志を継芸圃に執心厚き其人を待て附属せよとの事なりしか貴丈今秋七廻期追善の奇特によつて同門土弓に便りて贈之

寛延三庚午七月廿五日 播磨嗣男 長右衛門喜治 (印)

寄主 竹本政太夫丈 (20ウ)

嗚呼羨へし此一本也先師旧本を抜粹し書林山本氏に筆写せしめ師手つから朱点を加へられし手沢也往昔同門脇田氏崎陽に在て清人姑蘇の沈草亭に師伝の此一曲を語り聞せければ沈氏感喜の余りこの文句の和字を模して一軸とし且雅文を添えて先醒におくれり実 (21才) 本朝のみか異国までも声誉の聞え隠れなく竹田氏千前軒も追悼の句に はま千鳥跡を残すやふし墨譜と云しかも竹本二代の祖と称し給へり今拙師恩の便价と成て是を足下に附与す願はくは永く師恩を思ひて此一巻を貴重あらは弥冥加あるへきのみ

文囀子 土弓 (印) (21ウ)

(綴込紙片)

「此本は御宮様江上り被成候／其砌御語り被成候本是は／さ」

ばより像と式品参り候／是は證文とは違ひ候得共／讓物故御預り置被下度候」

注

- (1) 『増補用明天王・八曲篋掛絵』玉川大学出版部、二〇二二年二月。
- (2) 神津武男『浄瑠璃本史研究』八木書店、二〇〇九年、四七頁。
- (3) 山根為推『用明天王職人鑑』の諸本の考察、『続近松正本考』和泉書院、二〇〇六年、九一～一二〇頁。一五四頁も参照。
- (4) 前掲注(2)一〇一頁。なお、祐田善雄『近松浄瑠璃七行本の研究』『浄瑠璃史論考』中央公論社、一九七五年、二〇八～二三二も参考した。
- (5) 山根為雄『けいせい反魂香』の正本、前掲注(3)『続近松正本考』四七頁。
- (6) 前掲注(5)、三二頁。
- (7) 前掲注(5)、四九頁。
- (8) 神津武男 <https://twilog.org/Izumononjyo/date-121125> 2021年12月19日閲覧。
- (9) 前掲注(3)、一一六頁。
- (10) 前掲注(3)、一一七頁。
- (11) 坂本清恵「文学譜処理凡例」『義太夫節正本研究会翻刻凡例』二〇二二年二月

記

本稿を執筆するにあたり、神津武男氏に多くのご教示と資料の提示をいただいた。あつく御礼申し上げます。